
Mr. Marry Christmas

霜原 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr. Mary Christmas

【ノード】

N7940Z

【作者名】

霜原 葵

【あらすじ】

親元を離れて暮らす男は、クリスマスの日を、じばりくの間ひとりで迎えていた。そして、今年も……

一人身のクリスマスというのに慣れてきた。

果たして、今年で何度もだらつかと考え起こしてみると、また見当がつきそうもない。

仕方ない。今年も一人で迎えるか。

一年のうちで、いくつある特別な日を。

無感情な目覚まし時計の歌声で目が覚めた。

気分的にはさほどよろしくはないが、日々の生活リズムを崩すつもりなど毛頭にない。

掛け布団をどけて、冬の朝の冷たい空気が、熱^{ほて}った俺の体温を静かに奪っていく。

薄暗い部屋の中をゆっくりと移動して、静かに扉を開く。

リビングは大きな冷凍庫だった。

昨日以上の冷え込みだ。これは堪える。

たしか、ソーンスープは切らしていたはずだった。仕方ない。今日はホットコーヒーでも頂くか。

今日は少し変わったものが食べたい。そういうえば、昨夜のペペロンチーノが残っていたはずだ。もつたいないから食べてしまおう。レンジに入れている間に、布団でもたんてしまおうか。しなければならないことがたくさんありますけど、もうすでに疲れてしまいそうだが仕方が無い。

さてと、もうそろそろだらう。

この家に住む角野昌義さん一家が惨殺されているのが発見されました。警察の調べによりますと、角野さん一家は全身に渡つて鋭利な刃物で刺したような傷があり、出血多量で死亡したものと見ており、家の中には荒らされた形跡が無いことから、怨恨が原因と見て捜査を行つております。』

……朝から嫌なニュースだ。

この事件の犯人は、よくもまあ一家全員を殺害したものだ。何の恨みを持っていたのかは分からぬが、話し合いで解決することができなかつたのだろうか。

ましてや、この聖なる口に、血を流さなくともいいだらうに。

…………くわう。せっかくの朝食がおいしく感じられなくなつてしまつた。ふう。仕方ない。これくらいにして、少し出かけるとこよつ。風が冷たそうだな。しっかりと防寒対策をしていこう。

…………おや、ひげが伸びてきているな。忘れないように剃つておくとこよつ。

ふう、寒い。

我が家から一歩外に出ただけでこの有様か。これは選択肢を間違えてしまつたかな。

ひとまず、出でしまつたからには行けるといつまで行いつ。

まず、街のほうにでも行つてみようかな。

これはこれは。あたり一面、クリスマス一色に染まつていていだ。

それもそうか。今宵はクリスマスイブ。いつなるのも無理は無い。いや、それに気がつかなかつた俺が遅れているんだな。

この「ひる」「今」その瞬間だけを見て生活しているのが続いていたから、日付を忘れていたのかもしれない。

いや、朝はしっかりと分かっていたはずだ。何故だ。

…………ひとまず、どこか休める場所でも探すとしよう。

腕時計を見ると、午前十一時を僅かに過ぎた頃。普段なら子供を連れた母親たちが集う街の小さな公園も、大寒波到来のためか、今田はさびしく見える。空いているベンチに腰を下ろすと、身に着けている衣服越しに寒さが伝わってきて、思わず身体を震わせる。

それにしても、さみしいものだ。人の声が聞こえるだけで、暖かさを分けてもらえるところに、今田に限っては、風が俺に寒さを無理やり押し付けてくる。

ここにあるのは、塗装の剥げかけた動物型の遊具に、枯れた木立、寂しそうに風に揺られるブランコに、今、俺が座っている青が少しはげたベンチだけ。彼らがもし感情を持っていたのなら、きっと「寒いから何か掛けてくれ」とでも言うかもしない。

……すまないな。今の俺には余りの防寒着を持ち合わせていないんだ。

だから、せめてもの思いで寄り添うことしかできないんだよ。

……ああ、俺、なにやっているんだろう。

先ほどの街の賑わいから置いていかれてしまったようなこの公園で、一人こつして時間を無駄に浪費して。

このままここにいたら、俺までも置いていかれてしまう。
申し訳ないが、ここらで失敬させてもらいつ。風なんか引く感じがないぞ。

公園から立ち去るとき、後ろから「やつ君！」と声が聞こえたような気がした。

どのくらい歩いてきたのだろう。

あたりを見渡せば、田んぼが広がり、少し離れたところにさあやかな街が見える。

結構な距離を歩いてきたんだな。俺もまだまだいけっこつこうとか。

頭の上では、侘しく黒の使いが孤独を嘆いて鳴き、ただならぬ哀愁を漂わせている。

ふと、視線を遠くに移せば、遠くの山々には白粉が施してあって、冬、到来とばかりの姿を晒している。昨日はあんなものといかなつたから、昨晩だけで今のようになつたのだな。これは今晚も降りそうだ……。

……おや、うわさをすれば、もう降り出して來たか。

空を仰ぐと、先ほどまでの晴天が嘘のように一面灰色に染まり、そこからひらりと雪虫たちが降り注ぐ。まつたく、気まぐれな天氣だ。

それにしても、傘を置いてきてしまったから、このままここに座るのはまずい。ひどくならないうちに、街のほうへ戻るとするか。

街へ戻る頃には、あたりはすでに暗くなってしまった。
まぶしいばかりに明かりが灯され、それに応するように流れる一

昔流行ったクリスマスソング。

夕食のために入った喫茶店から見るこの街は、なんだか生きているように見える。

俺は、この街の一部として生きているんだとこう考えが頭をよぎるが、即座に捨て去つた。

それは当たり前すぎて、今まで知らずの内に知っていた周知の事実。考えるだけ無駄なことだ。

さて、食べてしまおうかと思つて手に取つたオープンサンドウイツチは、すでに冷たくなつてしまつていた。

店を後にすると、特に行き場の無い俺は町を彷徨うこととした。

今は街一番の通りを駅方面に向かつてはいるが、格別駅に用は無い。

それにしても、この路には若い恋人たちが数多くいるものだ。こ

れまでに、もう十指では数え切れないほどのかップルとであった。

これも、きっと今日が特別な日だからだわ。

特別羨ましいとは思わないが、街に出てくると、やはり自分が一人だということに気づかされる。

そうして早くなる歩調。傍から見れば、カップルたちに嫉妬するかわいそうな男と見えてしまうかもしれないな。これは傑作だ。両親が知つたらどうなることだろ？

……いや、知らないほうが良いな。後々苦労することになるだろうからな。

歩いていると、ほろりと雪が降り始める。

先ほどまでやんでいたのに、また来てしまったか。ほんとうに気まぐれな天氣だ。嫌われ者め。

道路をあわてて走つていく車は、見てると少し可笑しく見えた。

……おや、この曲は。

クリスマスソングではあるだろうが、少し場違いにしか思えない。……というより、聖夜の雰囲気を、冷酷な一撃の下に破壊してしまつている。

まつたぐ。選曲ミスも甚だしい。

ふと、顔を上げると、見事にライトアップされた大きなクリスマスツリーが俺を出迎えた。

……ふつ。

見上げれば、最上部に輝くばかりの星が鎮座していた。

なんだって、今日は。

自分でも頬がほころんだのを感じながら、囁くよつな小さな声が、俺の口を突いて出た。

「Good evening, Mr. Marry Chris
tmas」

(後書き)

つたない作品ですが、『』一読いただきありがとうございます。

追記としてですが、当作品は、一定期間のうち『短編集』に追加いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7940z/>

Mr. Marry Christmas

2011年12月25日15時50分発行